
blue bird,broken dreams

すーじー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blue bird / broken dreams

【Nコード】

N7012Y

【作者名】

すーじー

【あらすじ】

魔女シリーズ。重複投稿

(前書き)

昔のやじろ .

夏のある日、彼女が人身事故にあった。意識不明の重態らしい。

正確には、元彼女だ。彼女 非常にややこしいが、こちらは代名詞の意味で彼女 が事故に遭い、生死の境界線をさまよう羽目になった、たったの数十分前、ぼくたちは昼下がりの冷房が効いた喫茶店で、角氷ばかりのアイスコーヒーを飲みながら別れ話をした。何年間も半ば惰性で続けていた恋人という関係のことについて、別れることを前提に話し合おう、ということになったのだ。だが実際に顔を合わせてみれば双方が何を喋っていいかわからず、という状態で、『話し合い』と言うよりは『話しかけ合い』に近く、空虚な今後の処理について もらった指輪は返しておくわ、わかったよ、そんな感じの本当に空っぽでがらんどうな会話 を肴にコーヒーを飲んでいたようなものだった。二人を取り巻く空気だけが、乾いていた。

一通りのことを『話しかけ合った』あと、これは二人のためなよ、と彼女はお互いに言い聞かせるように言った。きつと、この会合を終わりにしたかったのだろう。ありふれた言葉だ、と思った。ぼく自身は、彼女のことはずっと好きだったつもりだったが、彼女を引き留める権能はないんだ、と察していた。だから、そうだね、と頷いた。

喫茶店のレジに立ったとき、勘定はぼくが持つよ、と申し出た。彼女は、もうこれで最後なんだからワリカンで、とかぶりを振った。その時になってやっと、ああ、別れるんだな、と自覚できたんだと思う。お腹の中の臓器をすべて、どこかに置き忘れてきた心地がしたから。それもそうか、とぼくは彼女に同意した。二人で喫茶店を出てすぐ、彼女は、さようなら、という一言だけを口にした。元気でね、というぼくの言葉に振り返りもせず、彼女は足早に人混みの中に消えていった。消えるまで、小さな背中を眺めていた。

上辺だけでも親しかった男女が別れるのには、四方山の事情がある。意見が合わない。浮気した。ちぐはぐ、すれ違い。縛られるのがイヤ。優しくしてくれない。身体だけが目的だった。とりあえず今思い浮かぶのはこれくらいだが、例は多くはいらない。ここで要となるのは、ぼくたちが別れた理由だからだ。何故ぼくらは決別したのか？ 前述した統計の上位を占めるような理由があったからだろうか？ 非があったのはどちらなのだろうか？ あるいは、どちらにも原因があったのか、なかったのか。報せが入ったのは、そんなことをぼんやりと考えていた最中のことだった。おかげで有耶無耶になってしまつて、別れた理由は宙に放り出されたままわからなくなつた。

彼女の母親から電話がかかつてきたのは、喫茶店の前で彼女の背中を見送つて少し経つたあとだった。ぼくらの間柄は、両親たちの公認下であり、だから彼女の母親はぼくにいち早く知らせたのだろう。彼女が非常に危険な状態にあることを。

集中治療室に入った瞬間、ぼくはどきりとした。心臓に矢を射かけられたかと思つた。病院の清楚なベッドで眠る彼女は、とても綺麗だったのだ。たくさんのチューブが彼女の体の上をことわりもなく縦横無尽に走っている様は一見醜くあり、彼女を汚されたような憤り、あるいは嫉妬が臍の底で渦巻いたが、逆説的に 官能を刺激された。今までこんなに美しい彼女の姿は いや、彼女に限定せず、ぼくが生きてきて目にしてきたものの中で、これほどまでに美しいものには出会つたことがなかった。彼女のことなら何でも知っていると自負していたけど、もろい自負だったようだ。ぼくは彼女のことなんか忘れて、美しい彼女にただ魅入つていた。虜になつていたと言つても過言ではない。今更ながら、ぼくは彼女に夢中になつたのだ。

ぼくが茫然と彼女を見つめっていると、彼女の家族がぼくを慰めに来た。我を忘れたぼくを、心配したらしい。彼女の家族は、ぼくたちが縁を切つたことを知らないようだった。彼女は家族に何も伝え

なかったのだろう。だから世間的には、ぼくは恋人が不慮の事故に遭遇した悲劇の人物、ということになっている。ぼくらの仲については訊かれなかったので、当然だ、訊くはずがない、もう恋人関係ではない、と訂正はしなかった。本来ぼくと彼女の家族は傷を舐め合う立場であったはずなのだが、ぼくが一方的に、本当に一方的、頼んだわけじゃないのに、なだめられる形となった。だけれどぼくはとりわけ気にしなかった。何故なら、綺麗な彼女の虜になっただけだからだ。ずっと押し黙って、彼女を熟視していた。

しばらくすると、医者が看護士を従えてやって来た。医者は彼女の両親に重々しく宣告した。残念なことですが、現代の医療技術では、手の打ちようがありません。おそらく娘さんが目を覚ますことは、二度とないでしょう、と。彼女の母親は嗚咽を漏らしながら、泣き崩れた。ですが……、と医者の通告は続いた。たった一つだけ意識を取り戻す方法があります。それは、幸せの青い鳥を捕まえることです。幸せの青い鳥があれば、娘さんは意識を取り戻すでしょう。死んだように眠る彼女の前で、医者は確かにそう言ったのだ。ぼくは雷に打たれたような気がした。青い鳥があれば、彼女がまた目を覚ます。目を覚ます

青い鳥でどうやって彼女が目覚めるのかはわからない。煎じて飲むのかもしれないし、焼いて食べるのかもしれない。もしかすると青い鳥固有の臓器を、彼女に移植するのもかも。幸せの青い鳥は実は魔女で、魔法で彼女を治癒してくれるのではないか、そんな可能性も考えてみた。でもすぐに、そんなことはどうでもよくなってしまった。結局、ぼくが治療法を把握したところで、もたらされる結果は左右しない。青い鳥があれば、彼女の意識は戻る。重要なのはそこだけだ。

ぼくは、まるで死人を生き返らせるみたいだな、という感想を抱いた。彼女はまだ生きているが、死んだも同然だ。だって、青い鳥という救いの手がなければ死ぬまで起きないのだ。ぼくは哲学者ではないので生死の定義なんか知ったことではない。意識不明の重態

死亡の式は、ぼくのなかでは成立していた。

死んだ人間を蘇生させることが禁忌であることは承知している。イエス・キリストだって他動せず、自動的にしか行わなかったらいいのだし。それは何故？ 真理は明快。死者を復活させてしまうと、人間の命の価値が薄まってしまふから。命が安くなる、だから人はもつと人を殺すだろう。まるでスポーツでもするような感覚で隣人の命を奪うだろう。蘇らせることは殺人の励起であり、しかし逆説的な殺人の徹底的封殺でもある。そもそも人を殺すこと自体が不成立となってくる。殺人が殺人の意味を忘れてしまうのだ。先週首を刎ねたはずの友人が、気さくに世間話をふっかけてくる。昨日頭を撃ち抜いたはずの恋人と、唇を重ねる。今し方毒を盛ったはずの子供に、食事を用意する。そんな世界で、いったい誰が生きていける？ たぶん、みんな狂ってしまう。倫理的に言うとならぬ。死んだに等しい彼女を起こしてはいけない。ぼくはそのことを、頭ではちゃんと理解していた。

医者 of 報告を耳にすると、ぼくはすぐさまに病室を飛びだした。取るものも取りあえず、旅に出た。もちろん、青い鳥を探すためだ。こんな状況で傷心旅行に出掛けられるか？ すくなくとも、ぼくには無理だ。

端から見れば、つまり悲劇の人物であるぼくの一連の行動には無矛盾性が満ちており、おかしいところなんて一切見当たらない。みんな即席の哀れみと安っぽい感傷の眼差しを向けるだけで、ぼくのことを見とがめなかった。制止されてもめんどろなだけで、ぼくにとっては好都合なことだったが。

幸せの青い鳥が何処にいるかなんて、ぼくは知らない。聞いたこともない。青い鳥に関する知識も、ぼくのうんちくの中にはない。どんな大きさ、どんな容姿、何を食べるのか、習性はあるのか。知らない。でも、探した。とにかく探した。山にも登ったし、森の中もさまよった。大きな船で大きな海を横切って、異国の土を踏んだ。痩せた台地を這うように歩いたし、都会の人混みに揉まれて流され

た。青い鳥が巣を作っつていそうな海の底まで踏破した。

そしてやつと　ぼくは青い鳥を見つけた。今ぼくの手の中にいる小鳥の青は、あたかも落ちてきた空をひとえに被ったようだ、とも、さながら海をそのまま詰め込んだようだ、とも形容できたかもしれない。ただどあいにくぼくの第一印象は、まるでまちがってペンキ缶に落ち込んだみたいだな、というものだった。汚い色だ、としか感じない。

ぼくは青い鳥の小さな頭を慈しむように撫でると、そのまま一息にねじ切った。簡単に千切れた。汚い青色を、溢れる綺麗な赤色が陵辱する。ああ、よかった、とぼくは胸をなで下ろす。

これで彼女は目を覚まさない。

彼女は死ぬまで綺麗なままだろう。

ぼくが彼女を突き飛ばしたことも、明るみに出ないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7012y/>

blue bird,broken dreams

2011年11月21日03時21分発行